

いくさば 「沖縄、再び戦場へ」

(仮題)

スピンオフ作品〈45分〉

作品資料

この〈スピンオフ作品資料〉は、WEB「マガジン9」で連載している「三上智恵の沖縄〈辺野古・高江〉撮影日記」から転載し、字数を整えたものになります（制作：三上智恵）。
上映会の参加者の方たちへの解説にお役立てください。



* 2014年からの撮影日記と動画は、
バックナンバーでどなたでも無料で見ることができます。
<https://maga9.jp/author/mikami/>

〈お問い合わせ〉

沖縄記録映画製作を応援する会 事務局

Eメール：info@okinawakiroku.com / okinawakirokueiga@gmail.com

TEL:03-5919-1542(平日 11:00~18:00) FAX:03-5919-1543

〒160-0022 東京都新宿区新宿5丁目4-1 新宿Qフラットビル 306号室 東風内

2019年4月3日

「島の色が変わった日」宮古島に陸上自衛隊がやってきた

宮古島には地对艦ミサイル部隊、地对空ミサイル部隊、警備隊、合わせて800人規模の陸上自衛隊駐屯地が開設される計画だが、3月26日、先発の宮古警備隊380人の「編成完結式」が行われた。沖縄戦以来、陸兵が軍服を着て宮古島を闊歩する姿など誰も見たことはない。だが軍事基地の島になることを望まない人々のあらゆる抵抗も空しく、ついに陸上自衛隊始動の日が来てしまった。

沖縄本島に住んでいると、米兵はもちろん、自衛隊駐屯地周辺では隊員の姿は目に入る。でも軍事基地と無縁だった宮古島や石垣島の人にとっては「迷彩服に軍帽」は戸惑うだろう。近親者に自衛隊員がいる家庭は多くても島外の駐屯地にいるのだから馴染みはない。島の活性化や災害救助も考えて受け入れてもいいと考えた島民も少なくないが、港から軍事車両が続々と島に上陸してきた日、宮古島の人々は度肝を抜かれたという。それらが島の道を走り、迷彩服の青年たちがコンビニにいる風景がいきなり出現した。自衛隊に関心もなかった人の日常も、塗

り替えられた。島の色が、変わったのだ。

私は式典を取材するため、この前までグリーンネットに囲まれた「千代田ゴルフクラブ」だった敷地に入った。「陸上自衛隊宮古駐屯地」という看板が掲げられた入り口付近にはいくつかの監視カメラが目に入る。パリティとした迷彩服の広報担当の方が「三上さん…ですね?」と迎えてくれた。市ヶ谷から応援できているそうで、物腰も柔らかく頭脳明晰な印象だった。北海道ではヘリのパイロットもしていたというので、陸自に配備されるオスプレイはここにも飛んでくるんですよね? と聞いてみたが、「宮古島に配備される計画はありません」との回答。「陸自でヘリのパイロットをされているなら、そのうちオスプレイ搭乗ってこともあるんですか?」と聞くと「はい、可能性はあります」と即答した。「シミュレーターで操縦したことはあるんですが…。優秀ないい機材ですよ」と屈託のない笑顔で答えた。

やがて報道陣はできたての体育館に案内された。そこには「編成完結式」を待つ隊員とゲストがすでに整列していた。式典の目的は、発足する宮古警備隊の士気高揚・団結強化、島民との一体感の醸成だそう。そういう割に、島から式典に招待されたのは下地宮古島市長と野津自衛隊協力会会長くらいしか見つけられなかった。たった20分の短い式だったが、独特の号令が叫ばれ、君が代が歌われ、一体何を撮影しているのか?と軽いめまいが襲う。軍ではない、自衛隊だ。軍服ではない、隊服だということかもしれない。でも目の前の光景はどう言い換えたって、日の丸に向かって敬礼し軍隊式の前進をする数百人の兵隊だ。この島では太平洋戦争以来の光景であり、そして彼らは今後ずっとこの島に駐留するのだ。頭がくらくらするが、でもそれが現実なら、しっかり伝えなければならぬ。そのためにプレスの腕章つけてここにいるのだ、とカメラモニターに集中する。

下地市長が登場。日の丸にお辞儀をした後、隊員

に向かってアドリブだったのか、いきなり敬礼をした。返礼はなく、何となく会場が凍り付いたように感じた。下地市長は「災害に強い、安心・安全な宮古島…」などと祝辞を述べていたが、実はこの日重大な事実が分かった。市長は祝福ではなく怒り狂うべき日だったのだ。この千代田地区に駐屯地が選定され、受け入れられる条件に「ヘリパッドや弾薬庫など、住民が不安を抱くものはここにはおかない」という約束があった。2016年9月2日、宮古島市役所を訪れた若宮防衛副大臣のその言葉を受け、「弾薬庫がない、隊員の宿舎や福利厚生施設がメインと聞いて安心しました」と言って受入れたのは下地市長本人だ。しかしこの日、なんと宮古島駐屯地にミサイルがあることが分かったのだ。

弾薬庫は置かないと言った2016年の動画はある。その後、弾薬庫と覆土式の射場は島の南東の端に当たる保良地区に作るようになってしまったが、平良市街地に近いここには「弾薬庫は作らない」約束は生きている。ところが、ピラミッド型のどう見ても弾薬庫という建造物ができている。そこには警備隊の所持する89式小銃などを保管する「保管庫」はつくる、と説明は一転した。

敵の弾薬庫を狙わない作戦などない。火器がある場所は必ず標的になるから、弾薬庫の有無に住民はとことんこだわったのだ。ところが小銃の保管どころではなかった。この式典の前後に私と数人の記者

で、小銃のどんな弾を置くのか？ほかには何か置くのか？と担当者を囲んで聞いたところ「中距離多目的誘導弾は警備隊が運用するので、その誘導弾は保管します」という。「え？この敷地内ですか？」と思わず聞き返した。このあと設置される地对艦・地对空ミサイル部隊の「ミサイル」は確かに保良の弾薬庫に置かれる。しかし、そのミサイル部隊は西部方面隊直轄の大砲も備えた勇ましい部隊で、我々第15旅団配下の、地域密着型の警備隊とは種類がだいぶ違うのです、という。だから彼らの弾は保良に。でも我々の誘導弾はここに置くと。もちろん誘導弾とは、ミサイルだ。

西部方面隊だ15旅団などと言われてもピンとこない。だいぶ柔らかいというその**第15旅団とはどんな部隊なのか。(HIP)**を見ると真っ先に飛び込んでくるのは「県民のために」というキャッチコピー。そして緊急患者空輸の数、不発弾処理の数が大きく揭示され、沖縄県民の安心と安全に寄与していることが強調されている。確かに離島を抱える沖縄県で、ドクターヘリがカバーできないところを自衛隊が担ってくれていることに感謝しない県民はいない。不発弾だってまだ莫大な量が地中に眠る中で、自然災害にとどまらず、自衛隊の活動に期待される部分は大きい。しかしそれと、南西諸島の軍事要塞化ははっきり分けて考えなければならぬ。かたや完全に県民の安全のため、しかしミサイル部隊を新たに

島々に配置していく今の戦略構想が誰の安心のためなのか？は大いに疑問がつくからだ。

今回ミサイル部隊に先駆けて発足した「宮古警備隊」は、第15旅団の配下であるから地域密着型で、島民の安全を支える、地域と連携する、住民と向き合ってくれる部隊と言いたいようだ。ならば小銃、機関銃・多目的誘導弾という装備は何に使うのか？と聞いたところ、近接戦闘に対応する部隊なのだと説明があった。不審者、島へのテロ部隊の侵入などあれば接近戦をするのはミサイル部隊ではなく警備隊の仕事。そして最悪の事態、つまり敵が上陸してきたときには接近戦で真っ先に対処するのもこの警備隊だという。

「ちょっと言い方は悪いけれどこういうことですか？」と私は前置きをして聞いてみた。

「地对艦ミサイルや地对空ミサイルが抑止力としてもはや機能せず、敵が砲弾を降らせ接近し上陸してきたら、皆さん警備隊が島の上で闘う。せん滅されたら、水陸機動団が島を奪還しに来るわけですね。皆さんは、最初に犠牲になっちゃう部隊ということですか」

「まあ、そうならないように事前にあらゆる手は打つわけですけれどね」と苦笑した。

私は彼らが心底の毒になってきた。私はこの2

年、映画製作のために沖縄戦のことばかり考える日々を送ってきたせいか、米兵の上陸に、貧弱な火器で対抗させられた日本軍の哀れな陸戦の残像が脳裏に叩き込まれている。山にこもってゲリラ戦をするしかなかった少年兵や、最後まで援軍が来ると信じて住民に協力を強いた無頼漢たちや、あらゆるイメージがあふれ出す。パリッとした迷彩服を着たこの隊員たちには、私の頭に広がる沖縄戦の悲惨な具体的なイメージはほぼないだろう。自衛隊と旧日本軍を一緒にするなとまず言われるだろう。作戦も装備も全く違う、お話にならないと。でも、そうだろうか。敵に上陸される事態というのはもう、制空権も制海権もない状態だ。孤立した軍隊は奪還部隊を待つわけだが、食糧は？ 水は？ そして住民がどこか安全な場所に隔離されて十分な食糧と水が与えられるという想像は、私には全くできない。

そもそもこの島がミサイルの拠点でなければ、攻撃対象にもならない。制圧すべき敵軍がない島なら上陸する必要がない。よもや上陸されても戦闘がなければ犠牲者はない。沖縄戦では軍隊が駐留していない島には死人は出ていない。だから、安心のためにミサイルを置くと言われても「誰のための安心ですか？」と反問せざるを得ないのだ。

そんな、不安に胸が張り裂けそうな住民たちが、早朝から駐屯地のゲートの前に集まっていた。宮古

島駐屯地の田中広明司令官に直接抗議文を手渡したと、前日から広報担当者に申し入れをしていたが、住民のいるゲートまできて受け取るということではない規則だという。集まった人たちは納得できない。なぜここに顔を見せて、みんなが抱えている不安に正面から受け止めてくれないのか。口惜しさが募って声を荒らげる場面もある。対応した自衛官の困惑の表情を見たら、誰でも気の毒に思うだろう。けれども、自衛隊が来ると決まってからこの4年間に島の人々が味わってきた不安と怒りと屈辱は並大抵ではなかった。決してこの映像だけで反対運動が過激などと判断しないでいただきたい。

住民の不満は弾薬の件だけではない。軟弱地盤や活断層の存在が指摘されているのに調査もされないこと、地下水の汚染が命取りになる島なのに防衛省の対応はこれまではぐらかしやごまかしだらけだったこと、島に入ってきたと同時に弾薬庫の上から住民を監視していること、迷彩服のまま市街地に出てきて住民が怖がっていること……。そんな住民の切実な訴えに警備隊長であり駐屯地司令官である田中隊長がどう向き合ってくれるのか。しかし早朝から待っていた住民に姿を現したのは児玉副隊長だった。

そのやり取りは、つらくなる場面も多かった。自分の畑の目の前にゲートが作られてしまった野原の農業・仲里盛繁さんも繰り返していたように、「自衛隊員に対しては怒りも憎しみもない。ミサイル基地

を持ってこられることに抗議している」のであって、抗議はすべて住民不在で推し進めてきた防衛省や現政権にむけられている。

しかし、いざ目の前で職務についた隊員たちに向き合った時に、怒りの拳は宙を泳ぐ。矛先は彼らではないとわかってはいる。隊員たちは家族を連れて島に来た。新しい環境で、海がきれいだけど歓迎されていないという話も聞いている南の島で、恐る恐る生活を始める妻や子どもを抱えているのだ。幕僚たちが米軍とどんな戦略を練っているのか、そんな話は知る由もない隊員たちは、島の役に立ちたい、溶け込みたい、島を守りたいし誤解は（誤解であるかどうかはさておき）解きたいと願っているだろう。そのためにこの後あらゆる努力を重ねるのだろう。島の人々だって、職業によって差別するつもりも毛頭ない。来てくれたのなら分け隔てなく受け入れたい気持ちはある。けれども人間として地域に受け入れようと心を開きながら、自衛隊の動向に目を光らせ抗議の声を上げ続けるのは難しい。毎日心に棘を出していたら自分も傷つけてしまう。ママ友になり、「自衛隊の子」なんて意識もせず一緒に遊ぶ子どもを世話するだろう。そして「情報収集や抗議」をする気持ちは萎えていく。

4人の子を抱えて反対運動してきた石嶺香織さんに、いつもの元気はなかった。「これから一緒に暮らす人たち。うちの子の友達のお父さんになる人た

ち。この人たちが敵ではないのはもちろんだけど……今の反対運動のやり方では島の人たちの気持ちは離れて行ってしまうかもしれない」と肩を落とした。

「出来てしまった施設に声を上げ続けるのはしんどいね」と、野原出身の上里清美さんは苦しそうに言う。メガホンを持つときには強い口調で気丈に抵抗の言葉をぶつけていた彼女だったが、一対一で話す声は細く、心はかなり痛手を負っていることが伝わってきた。

「だから私、伊江島に行ってきたの。あそこが（基地と県民が対峙する）原点だと思ってさ」

「もう配備されてしまった軍隊と、このあとどうやって闘えばいいのか知りたくて。きつとこの闘いは長く続くでしょ。住民が分断されないためにはどうしたらいいか。これから自衛隊ももっとたくさん来て、米軍も来て、となったときに自分の感情をどうコントロールできるのかわからなくて。ちゃんと精神を保ちながら戦うのはどうしたらいいの？」と伊江島に教わりたくて行ってきたんだけどね」「もう、人間らしく闘うということしかないね。人間らしく、人として生きながら。相手にも接しながら。それしかないのかなって思いますね」

阿波根昌鴻（あはごんしょうこう）さんに象徴される伊江島の闘い。沖縄戦の後、真っ先に土地も畑

も米軍に取り上げられた伊江島の住民たちは、その惨状を県民全体に訴えるために沖縄本島でムシロ旗を掲げて「乞食行進」をした。そして島では完全非暴力で、農民の誇りを失うことなく堂々と抵抗を続け、その後の沖縄基地闘争の手法となった。この闘いで「勝った」わけではない。伊江島は今現在も米軍基地だらけだ。しかし「負けて」もない。抵抗の旗を降ろしてもいないし、辺野古に、高江に、宮古に、石垣に、その精神は確実に受け継がれているから。

2019年、平成だ令和だと騒いでいるこの時代に、1955年の伊江島の闘いを胸に、力を振り絞って野原に立つ女性がいる。彼女が草を摘んで遊んだ野原が、彼女を潤した井戸が、彼女が拝む神さまが住む森は、自衛隊基地になり、奪われ、踏みこじられてしまった。それは1955年に伊江島の人たちが味わった屈辱や絶望と変わらないことに愕然とする。沖縄県民のささやかな生活は、64年経ってもかくも脆く、米軍統治下でなくなってもなお、民主主義も司法の救いも届かない。なんなんだ、これは！

「平成が、その名の通り平和の裡に終わってよかったです」という女性タレントの言葉で我慢も限界、テレビを切った。しかし怒っている場合ではない。出来てしまった基地に対して抵抗を続けるという苦しい技を、伊江島も、辺野古も、高江もやっている。

あきらめてしまったら、じゃあ、とどんどん負担を増やされるだろう。だから宮古島も今年度やってくるミサイル部隊に抵抗し、保良の弾薬庫を造らせない闘いをし、ここは使えない島だと国にあきらめて作戦を変更してもらおう。それを目指すしかない。一部工事が始まった石垣島にも繋がる、島人が望まない軍事化を止める行動を構築していかなくては。

今回、宮古島に駐留する自衛隊員たちと直に接して意外だったのは、少なくとも今のところ私たちに向き合う姿勢を持っていることだ。これまで説明会などで接してきた防衛省の役人とは大違いだった。私は数年来、講演会で公言しているが、自衛隊員や、機動隊員や海上保安庁の海猿たちや、基地建設を巡って対峙してしまう職業の人たちについて、彼らの仕事の尊厳も命も守りたいと思う。彼らは自ら誇りに思い、国民から感謝される仕事をするべきであり、そのために日々の鍛錬をしていくはずなのだ。であれば、私たちが有権者が、「お互いを苦しめる間違った仕事を命じる狂ったシステム」を変えるべきなのだ。そのためにも、自衛隊の仕事や隊員の状況についても取材して知らせていく仕事をしたい。宮古島の嘆きに向き合い続けたい。決して逃げたくはない。

2019年10月9日

弾薬庫に抵抗する保良の人々〜宮古島・自衛隊弾薬庫着工〜

10月7日、ついに宮古島で陸上自衛隊ミサイル基地の「弾薬庫」が着工された。今年3月からすでに「自衛隊宮古警備隊」の駐留は始まっているが、島民が最も恐れている「ミサイル部隊」は、このミサイルを保管する弾薬庫が完成しないことにはやって来ない。

火災になれば大爆発になるし、何より有事には真っ先に標的になってしまう弾薬庫という物騒なものを、宮古島のどこに置くのか。二転三転して保良（ぼら）地区に決まったというが、集落ははっきり反対の声を上げていた。にもかかわらず、これ以上遅らせられないと10月着工が宣言され、3日には住民説明会が開かれた。防衛省が住民説明会を開いて住民の理解を得たとアリバイを作り、直ちに着工、というパターンは辺野古でも高江でも繰り返されてきた。そして今回もその通りになったわけだ。

「弾薬」を巡っては、防衛局が宮古島市との約束を

守らなかつたため、3月末の陸上自衛隊駐屯地開設の初日から事態は紛糾した。結局は、当時の岩屋毅防衛相が国会で謝罪し、一度持ち込まれたミサイルなどはいったん島外に撤去されていた。しかしミサイルがなければ部隊が来ても機能しないわけで、防衛局は宮古島の南東の端にある城辺（ぐすくべ）保良に弾薬庫を完成させて、あらためて運び込むと宣言していた。

その保良の弾薬庫予定地というのは、住宅地からわずか200メートルと接近した場所にある。陸上自衛隊の教範には「誘導弾が火災に包まれた場合には1キロ以上の距離に避難」とあるが、住民はその最低の距離も確保できていない場所に住んでいる。そこに造るといふのはいったいどういうことか。また、火薬類取締法の保安基準から算定すると、200メートル先に民家があるなら2トンの弾薬しか保管できないはずだが、推計では地对艦ミサイルおよそ7トン、地对空ミサイルおよそ4.5トン、中距離

多目的ミサイルと迫撃砲およそ13トンが弾薬庫に入る予定だということ、保安距離はおよそ380メートルとされる。そのような専門家の推定が報道されるようになると、防衛局は弾薬量を答えなくなくなってしまった。安全距離ラインの内側に、つまり危険エリアに、生きている人間が生活をしている。それを無視する「国土防衛」とは一体何なんだろうか。

10月3日に保良地区の公民館で行われた説明会で、会場に掲げられた看板が住民を怒らせた。「保良鉦山地区の建設工事について」としか書かれておらず、自衛隊の文字もなければ、住民が敏感になっている「弾薬庫」「火薬庫」という言葉もない。物騒な言葉を隠せばなんとなくやり過ぎせるだろうという防衛局の姿勢、誠実さのかけらもないその無礼さに、住民のプライドは踏みにじられた。一から十まで住民をだまし、はぐらかして、軍事施設の犠牲を押し付けるのか。うっかり誤魔化されるとでも思うのか。

先祖から引き継いだ土地に築き上げてきた静かな暮らしを子や孫に手渡したい。この地域の未来も希望も、よりよってこんな形で奪っていくのか。悔しくてやりきれない保良の人たち100人は、会場まで来たものの中には入らず、地域を愚弄する説明会をポイコットした。保良の女性は言った。

「千代田の駐屯地に、住民をだまして中距離誘導弾を置いたが、怒りをもって謝罪して撤去した。それを保良に持つてくるって？ 保良は、なんですか？ 馬鹿にされてるんですか」

なぜ、保良にこんな酷いことができるのか。ここが選ばれた理由の一つは、人口密集地である市街地平良から最も遠いからだ。今も不発弾の保管施設がこの地域に置かれているのも、何かあっても被害が小さいという過疎地に、弱いところに犠牲を押し付ける残酷な考え方があるからだ。三角形の宮古島の底辺の右端。東平安名崎の付け根にある保良には、戦前にも旧日本軍が弾薬庫を置いていた。1944年2月、弾薬庫となっていた保良の木山壕周辺で兵隊らの手押し車から手榴弾が落下して爆発、少なくとも二人の兵隊が爆死、作業を手伝っていた8歳の女の子と、その子がおぶっていた1歳の赤ちゃんも亡くなってしまった。

かつて日本軍の弾薬庫をここに置かせたために悲劇を抱えてしまった保良が、なぜまた同じ運命を強

いられるのか。頭に破片がいっぱい刺さったまま息絶えたというその子は、「戦死」ではない。日本軍の起こした事故で死んだのだ。手伝わされていた危ない仕事に殺されたのだ。戦争でも天災でもない。軍事施設と共存する地域には折込済みの犠牲、明らかなる人災である。幼い姉妹の命と引き換えに残された教訓を、私たちの世代が受け取らずにまた地域に同じ危険を引き込むなら、それは彼女たちを二度殺すことになるのではないのか。

南西諸島の軍事基地化に対処するためには、辺野古だけにいるわけにはいかないと、山城博治さんも保良に駆けつけていた。沖縄の平和運動をけん引してきた平和運動センターを代表して、これまでも博治さんは石垣や宮古の自衛隊基地建設の現場にも通ってきた。今回も、地元保良の人々に遠慮し、地域のやり方を尊重しながらも、沖縄県民が長い米軍基地との闘いの中で培ってきた財産を宮古島の住民運動に繋げるために汗を流していた。緊張の局面であっても、現地からの電話で博治さんの声は明るかった。

「いやあ三上さん！ 保良は素敵なところだねえ！ ゆったりとした集落のたまたまいも、美しい豊かなし、なんと強いの信念で静かに怒りを燃やす先輩たちがね、元気なんだよ。よく来てくれた、と迎えられてね、嬉しいねえ」

説明会翌日は、工事着工を警戒して早朝から集合がかったのだが、博治さんが到着するとごつごつトラクターが2台、待機していた。保良の人々の本気を示そうと、農家の誇りであるトラクターでデモ行進しようというアイデアだった。博治さんは感激した。保良らしい抵抗ができるぞ、と小人数ながらも意気揚々と建設予定地に向かった。この日は測量の作業だけだった。やはり週明けか。そして予想通り、防衛局との交渉のため博治さんが本島に戻った翌週7日の朝、本格工事が始まってしまった。

列をなす巨大な工事車両。立ちほだかる住民の必死な声、メガホンで同じことを繰り返す防衛局員、島人同士が対立する構図、そこに到着する警察車両……。ここは本当に宮古島なのか？ 辺野古なのか？ 高江なのか？ ただ米軍の横暴、ではない。日本の自衛隊も、こうやって力づくで島に入ってくるのか。この20年見てきた各地の反対闘争現場の胸が痛む光景は、場所を変えてさらに拡大していくのか。なぜ止められないのだ？ 宮古島の次は、同じ光景が石垣島でも展開されていくというのか。

自衛隊基地建設が問題化した4年前から、立ち上がり、声を上げる人々を追いかけてきた。その人が、あの人、落胆する姿をみたくない。絶叫する声を聞きたくなかった。でも、このままだけ、辺野古のおばあのように、高江のゲンさんのように、怒りのおまざしや、悲しみに満ちた目を見ることになる。

だからそれを止めるために、この4年私は死に物狂いで先島の自衛隊配備に立ち向かってきたつもりだ。それも無意味だったということなのか。

しかしそんな私の感傷など役に立たない。そんなことよりも、諦めず、即効性を求めず、仲間を増や

し、小さな勝利も楽しみながら、いつか必ず軍事要塞の島を返上して、元通りの平和な島になることを繰り返していって、肝を据えてやっていくしかない。そう思う時、私が救われるのは、保良を始め抵抗の現場には、この人たちに寄り添い喜怒哀楽を共にしながらこの問題に向き合っていけたら大事なこ

とをもっと伝えられるかもしれない、と惹きつけられてしまう人々が何人もいることだ。博治さんもほれ込んでしまった保良のたたずまいも含めて、いつかちゃんと風景も人々も描きたい。そう熱望している。

2019年11月20日

クイチャー乱舞〜宮古島・弾薬庫建設阻止現場の一カ月〜

山城博治さんが、マイカーを宮古島に運び込んだ。居候させてもらう家も決まった。長く辺野古の基地建設反対の現場の指揮を執ってきた博治さんだが、9月末から宮古島の弾薬庫建設が本格的に動き出したことから、「住民の阻止行動の立ち上げに腰を据えて向き合いたい」と、当分は宮古島をベースに生活するという。やはり、巨大な弾薬庫を抱え込まれるという局面はそれほど重大なのだ。博治さんの本気度に、私も襟を正す。

沖縄の民俗学を学ぶならここしかない決めて私は成城大学に入った。柳田国男の直弟子の末弟子で、

唯一の女性だった鎌田久子教授が教鞭をとっていて、その鎌田先生は宮古島のシャーマニズムが専門だった。さらに、成城大学には社会人類学者で『沖縄池間島民俗誌』を書いた野口武徳教授もゼミを持っていて、私は幸福にもこの二つのゼミを経験した。だから調査地は必然的に宮古島になり、宮古島にまみれて幸せな学生生活を送った。当時は、池間島はおろか、来間島にも橋はかかっていなくて、ヤギや豚と一緒に小舟に乗せてもらって渡った。のちに社会人になってから入った沖縄国際大学で修士論文の舞台に選んだ大神島には、この二十数年で50回以上通い、本当の祖母以上に慕うおばあの家で、いつも実

家のように過ごさせてもらっている。

かけがえのない宮古島がどんどんかわっていく。島を引き裂いている自衛隊のミサイル基地建設問題は、とてもじゃないが時代の変化や環境破壊というレベルの出来事ではなかった。ところが私の持つ危機感は、さほど沖縄県民に共有されず、全国の報道は絶望的になかった。でも数年前からは山城博治さんが「辺野古米軍基地問題に衆目を引き付けておいて、本丸は自国軍による南西諸島の再軍事化ではないのか」と言ってくれるようになった。一方、博治さんの現場からの電話は、なぜか朗らかですらあった。

「三上さん。三上さんの大好きな宮古島はね、本当に素敵な人がたくさんいるよ」

そうやって博治さんは毎日のように、私に保良(ぼら)の人たちの魅力を語った。保良は弾薬庫が建設されようとしている地区の名前だ。デモ行進にトラックを繰り出すおじいたち。農作業の合間を縫って少しでも、と参加してくれる人々。宮古伝統の踊り「クイチャー」の指南をしてくださる女性たち。その中でも、特に「ミサイル・弾薬庫配備反対！住民の会」の共同代表で一日も欠かさずに現場に詰めている下地博盛(しもじひろもり)さんへの信頼を、日に日に厚くしていく様子がよく伝わってきた。

下地博盛さんは、保良生まれの保良育ち。少年時代、馬やヤギの草を刈るのは子供の仕事で、今座り込んでいる建設現場の付近はよく草刈りに来て遊び、海沿いの湧き水で水浴びをして帰った思い出の場所だそう。宮古島市に合併する前の城辺(ぐすくべ)町役場に長らく勤めていた下地博盛さんは、保良の区長を3期も務め、また宮古島市議会議員にまでなった地域のリーダーだが、人となりはいたって真面目で物静か。声も小さくおとなしい印象で、声の大きな博治さんとは真逆のキャラクターだ。住民の反対運動のリーダーになったらどんな風になるのか、想像がつかないタイプだった。しかし、小柄で明るくて活発な妻の薫さんと、そして本土から故郷に戻

ってきた娘の茜さんと、親子三人で必ず現場に、どんなに少人数の日でも欠かさずに立っていた。その誠実な人柄に、博治さんは絶大な信頼を置いていた。

69歳の下地博盛さんは、保良では「若手」だそう。ある日、今も毎日畑に出ている94歳のおじいさんが、博盛さんのところに駆け込んできてこう言ったという。

「自衛隊の弾薬庫の工事が始まった。博盛がいながら、何であんなことをさせるんだ！」

博盛さんという人間がいながら……、と古老に言わせるほどの信頼を得ていることがよくわかる。言葉はぶっきらぼうなおじいさんは、別の日に「お前がやっている抵抗は役に立っているのか？」と聞いてきたので、さすがの博盛さんもカチンときて、「毎日精いっぱいやってるんだ！」と言い返すと、翌日コーラやジュースの缶がいっぱい入った袋をもって現場に来てくれた。これには博治さんも感激した。90歳を超えた大先輩が、現役で土に向き合い、この土地を守りたいと居ても立ってもいられない想いをしている。現場を激励してくれる。高齢化が著しい181世帯・312人の保良だが、誇りをもって生きてきた土地を、生活や、踏みじられてなるものかという気概に満ちている。博治さんはこれまでの沖縄本島の闘いを、どうかこの保良で生かした

いと、新たな闘いの構築にのめり込んでいた。

元鉱山だった建設予定地に、毎日10台のトラックが朝から土を運んでくるのだが、ゲートの前に来られる人の数が、なんととっても少ない。博盛さんご夫妻しかいない時もある。最初の10日間は、座り込んで、警察官が20人もくれば数分で排除。唇を噛んでトラックを見送る悔しい場面も多かった。そのうちに、排除されるぎりぎりまで抵抗したら、あとは立ち上がってできるだけゆっくり歩いてトラックをなかなか進ませない「牛歩」で抵抗する形に移行していった。30分でも、一時間でも作業を遅らせたい。そういう積み重ねで辺野古の基地も20年抵抗を続けてきたのだ。一応「歩いて」いるから警察官も力づくでは移動させられない。そのうち、宮古伝統の「クイチャー」を踊りながら進むなど、宮古島ならではのアイデアも飛び出してきた。

そうやって、やっとひと月が過ぎる頃、辺野古の現場で頑張ってきた元気印の女性たち、通称「辺野古ネーネーズ」の6人が保良の現場にやって来た。彼女たちは歌って踊る辺野古の闘いを作り出したところには笑いと美味しいものがある。繰り出す替え歌も踊りも無尽蔵。辺野古の現場で培ったノウハウとエネルギーで宮古島の闘いを応援したいと、3泊4日で宮古島にやって来たのだった。

「早く宮古に来たかった。弾薬庫は絶対に造らせ
てはだめ！」

「博治さん、いつ帰って来るの？と最初は思った
けど、宮古島に来てよかったと思うわ！」

「辺野古に帰ってクイチャー広げなきゃ」とポジ
ティブなことこの上ない。

ところで、今回のポイントになる「クイチャー」と
いう踊りについて少し解説が必要だと思う。宮古で
は数々の「クイチャー」大会があるほど島を代表す
る芸能だが、もともとは、干ばつのたびに命の危機
にさらされてきた宮古島の人々の「雨乞いの踊り」
だった。飛行機から見ると、まるで三角形に切り取
った緑のフェルトを海に浮かべたような、山のない
宮古島。山がないから川もなく、地下水だけが頼り
の島で、水の確保が常に悩みだった。

その自然環境が厳しい島に、琉球王府は「世界一
残酷な税」と評された「人头税」を課した。これは廃
藩置県後も明治36年まで宮古島を苦しめた悪税で、
15歳から50歳まで、病人も関係なく、女性には
織物、男性には穀物を納めさせた。これは八重山地
方にも、つまり先島全体に課せられた重税で、一人
頭で課税されたため、働けない人、障がい者や老人
の分を誰かが負担する形になり、人減らしの悲しい
伝説も残っている。その悲しみと怒みは歌となって、
今も先島に染みついていて。それほど離島の人を絞
り上げた財力で建てた首里城を、先島の人たちはほど

う見てきたのか。焼失した首里城復興騒ぎも、保良
の土に座り込んでいると全く別世界のように感じる。
島人は、一年間死ぬ思いで働いて税金を納めた時
の歓喜、憂さ晴らしでこれを踊った。米や粟を納め
たのに、明日から家族が食べる分がないという解放
感と絶望の泣き笑いで、三日三晩、狂喜乱舞する島
民が歌い、舞ったのがクイチャーなのだ。歌詞も踊
り方も各地で違っているが、代表的な「漲水（はるみ
ず）クイチャー」の歌詞の大意はこうだ。

村の兄さんたち

もう農具を手に取りなくてもよくなるよ

漲水の船着き場の砂が

粟になって 米に化けて 勝手に上がって来るよ

島の姉さんたち

大神島に打ち寄せるさざ波が

糸になって 巻いた糸になって 上がってくれば

もう芋麻を作らなくても 糸車を触らなくても

よくなるのに

私は宮古島の美しい浜に打ち寄せる波を見ては、
この歌詞を思う。砂が米や粟になって勝手に打ち寄
せてくればいいのに。波の花が美しい糸になって、
綾なす織物になって私を解放してくれたらどんなに
楽になれるだろう。そんな幻想を見るほどの苦しみ
から270年も解放されなかったこの島を思う。

沖縄の中でも虐げられた先島の、その中でも根強
い差別と闘わなければならなかった宮古島。島の人
たちが人头税廃止運動に立ち上がった後も琉球士族や
警察に潰され、帝国議会に請願書を出して廃止にな
ったのは、実に明治36年。沖縄県は、この宮古島の
不当な重税と、そこに起因する貧困と差別を長く座
視していた。その歴史と、自衛隊による軍事要塞化
で助けを求めている先島の声に、米軍基地と闘って
きた知恵と蓄積があるはずの沖縄本島の人たちが敏
感に反応できていないことが、私には重なって見え
る。

長く沖縄本島に住んではいても、そんな先島を黙
殺する沖縄本島側の人間になりたくない一心で私は
じたばたしている。しかし、博治さんが全く同じ気
持ちを持っていてくれたことが、今回の取材でよく
分かった。宮古にこだわった民俗学者である谷川健
一にいたく傾倒していた青年期があつて、離島の歴
史と今を的確に捉える慧眼の主であることを改めて
知り、尊敬の念を新たにしたい。

そのことを語るとき、そして若い世代の楚南有香
子さんたちが苦勞をしていると知ったとき、博治さ
んはすぐに涙ぐむ。今回の3日間で、宮古島の歴史
を語る度に毎度涙目になる博治さんに向かって、辺
野古ネーネーズは「ナチブー（泣き虫）ヒロジ！ ま
た泣いてるさあー」と優しくはやし立てた。

数日前から風が急に北に変わった。一カ月見事に雨が降らなかつた保良のゲート前は、初めて雨交じりの強風に悩まされた。今日は雨具とカイロを持ってきてください、と呼びかけられている。宮古島の冬は風がとにかく強いので寒い。弾薬庫の工期は2年。テントも建てられない、トイレもない現場での抵抗の日々は、まだひと月だ。1997年から辺野

古の座り込みを見てきた私には、22年という年月の重みが刻まれているが、まだまだひと月、なんてとても言えない、毎日毎日が必死の保良の歳月がある。

現場は問います。国の安全のために我慢しろというのか。弾薬を枕に寝ろというのか。命があるだ

けましたでも言うのか。私の安全は国に任せてるんだから、私は加害者ではないと言えるのか。せめて、悩んでほしい。最低限、知ってほしい。現場を体験できる映像を届けますから。携帯電話やパソコンの液晶越しでもいいから、宮古島に寄り添う時間を、下さい。

2021年12月22日

宮古島にミサイル搬入く加速する要塞化く

「オリンピックが終わったら国内は一気にキナ臭くなる」と、私は2020年から言い続けてきたが、果たしてそれは現実になってしまった。少なくとも私の住む南西諸島の空気は、格段に変わってきた。11月の沖縄県内紙は、連日自衛隊の動きがトップを飾った。今回レポートする宮古島への自衛隊ミサイル本体の搬入のみならず、自衛隊の大規模演習や米軍の参加、県内に次々と新しい基地拠点を増やす動きが明るみになった。数日前のシンポジウムでは「沖縄を戦場にしない県民の会」結成が呼びかけられるなど、決して大げさではなく「戦争前夜の危機」

が叫ばれるようになってしまっている。

まずは11月14日、ついに宮古島に運び入れられてしまったミサイルを巡る状況を見て欲しい。元ゴルフ場だった千代田地区で宮古島駐屯地が2019年に動き出し、島の南東端に作られた大規模な弾薬庫を擁する「保良訓練場」が今年ほぼ完成したと言っても、ミサイルはまだ島に入っていないかった。もう入れ物ができているのだから、とか、島のリーダーが自衛隊基地建设を容認したから仕方ないので、といった冷めた見方もあるかもしれないが、少

なくとも住宅地から250mという距離に大量の弾薬が置かれる保良や七俣という集落は、一貫して拒否してきた。島の活性化や安全などの理由で賛成する人たちが人口の密集する中心部に多くいようとも「島の人は賛成している」と外から言われるのは暴論だ。

14日の早朝、まだ暗いうちにミサイルを積んだ戦車揚陸艦「しもきた」が、平良港の沖合に姿を現した。港のゲートではミサイル積載車を市街地に入れないと抗議する市民がすでに集まっている。警察車

両も待機している。突堤の先では、いつも石垣島で自衛隊基地を監視している男性が、黒く巨大な自衛艦が迫ってくる様子を撮影していた。近寄っていくと、目に涙を滲ませていたので、しばし言葉を失う。

「覚悟して来たけど、悔しい。私たちのくらしは、なぜこんなにならないがしろにされるのか？」

絞り出すような声で言った。宮古島でも石垣島でも、この6年、必死に反対してきた人々の存在がある。地道に集会を持ち、議会に要請したり、署名を集めたり、裁判に訴えたり、ありとあらゆる民主主義の手段で努力を重ねてきたことを見てきただけに、私も胸がかきむしられるような思いだった。踏ん張っている石垣島が最も工事を遅らせているが、石垣島での駐屯地の造成工事もかなり進んできた。基地が完成し、弾薬が運び込まれる今日の宮古島の姿は、明日の石垣島なのだ。

9時前、接岸した「しもきた」から危険物を搭載したことを示す「火」のマークを付けたトレーラーが姿を現した。間もなくミサイル積載車15台と、前後の自衛隊車両合わせておよそ40台の車列が整い、港のゲートが開く。宮古島市の職員がゲートを守るように立ちふさがる。自衛隊の車列の先頭は、桜のマークを付けたジープで、中にいる二人の若い隊員がマイクを握り、警告した。

「通行の妨げになっています。危ないので道をあけてください」。のっぺりとした声で繰り返す。

これには既視感がある。辺野古で、高江で、抵抗する県民に向かって防衛省の役人がメガホンで「道路に座り込む行為は、大変危険です」と壊れたレコーダーのように繰り返す光景。実際に人々を排除するのは機動隊だ。しかし、一瞬見慣れた構図のようにだが、これは全然違う局面を迎えたのだと気づいた。警察でも防衛局員でもなく、迷彩服を着てミサイルを携えた軍人が、直接島の人たちに「そこをどけ」と言っているのだ。かつて国防の名のもとに島々に有無を言わず乗り込んできた日本の軍隊が、島民の生活を破壊し、命の危機に陥れた。それと同じ構図が今、再現されているのだ。

今回、直接座り込む人々に手をかけて排除したのは沖縄県警であるが、今後自衛隊員はミサイルを発射するキャニスターを備えた車両で島内を走り回り、撃っては移動するという訓練を繰り返すことになる。そんな島の道路を進む先々に、もし抵抗する住民がいたら、毎回毎回警察に来て排除してもらえないだろう。その次は直接、自衛隊員が抵抗する住民を引きずって道をあけさせるしかない。有事には、作戦を優先する自衛隊員と足手まといになる住民という、沖縄戦と何ら変わらない構図に陥ってしまう。

「せめてどれだけの火薬を持ち込むのか説明してください。お願いしているんです！」

「警察のみなさん。私たちは島の平和を守りたいだけ。暮らしを守りたいだけ。わかってくれますよね？」

港に体を投げ出した人たちは口々に訴えるが、機動隊が一人ずつ排除していく。そこには、お母さんと小学生の娘の姿もあった。それはミサイル基地に反対してきたお母さんたちのグループの楚南有香子さん親子だった。車で待たせてもいいよ、という有香子さんと娘のやり取りがあり、最初は車の周りで遊んでいた娘さんだったが、座り込みが緊迫してくると自分からお母さんの隣に座った。ゲートが空き、排除が始まると、あまりの怖さに泣き出す場面もあった。それを見ていた、ミサイル車両の運び込みを見物している男性がヤジを飛ばした。

「こんなところに子どもを連れて来て、泣かして。子どもを泣かせるな！」

すると、泣いていた娘さんが彼に向かって堂々と言った。

「お母さんが私を泣かしたんじゃない。あれが泣かしたんだ！」 そう言って自衛隊の車列を指さした。

子どもを政治的な場に連れてくるなどという、一見正当に聞こえる批判が沖縄の抵抗の場に何度も投げかけられてきた。批判の主は、立ち上がらなければならぬ状況に置かれたことも、また人のために居ても立っても居られない気持ちになったこともない、多数派に抗うことを避けてきた人に違いない。そもそも政治的な場に行かないということ自体が政治的である。子どもに政治の実態を見せないということも悪質に政治的である。判断能力もない子どもを洗

脳する云々と言うが、親はいつも判断能力のない子どもを連れて社会を歩いているし、子どもは親の背中を見て真似をして育つ。親のすることを理解しようとして社会を学ぶ。この娘さんは、私の知る限りかなりの時間、島の平和や子どもたちの未来を守るために、と街で訴え、ピラを配り、寝る時間を削って資料を作るお母さんを見てきている。その結果が、このミサイルが入る日なのだと十分わかっている。お母さんがどんな気持ちでその日を迎えたのか、十二分にわかっていたと思う。だから、怖くて携帯電話を見る格好をしながらでも、お母さんの側にいてあげようとしたのだと思う。それが虐待だろうか？

デモが傍らを通っても知らないふりをし、困っている人たちの SOS にも関心を持たない親であれば、子どももどう関わっていいのかを学ぶ機会を奪われるし、政治的なことは黙殺するに限る、という親の生き方を身に着けるだろう。それは「社会に関わらない」という政治的な姿勢を植え付けていることになる。いつか守りたいものができた時に、状況にひるまず闘う大人たちの姿を知っているか否かが、その若者の未来を左右するだろう。そういう意味では、沖縄の子どもたちは周りに頑張る大人たちをたくさん見てきているという点において、どの地域よりもたくさんのお金をすでに貰っている。少なくとも私はそういう親子や、世代が交替し、若い人が力をつけていく場面をたくさん見てきた。誰にも奪われないうい財産が受け継がれていく瞬間を、見てきたのだ。

車列は昼過ぎには保良訓練場に到着し、ゲート前で抗議の声をあげる人々を越えて、最終目的地である弾薬庫の側に収まった。保良の男性は言った。

「いつも数人で、ゲート前で抗議したり監視したりしてきた。でも今日はこんなにたくさんに人が来てくれて心強い。これからまた反対、頑張ろうと。そういう気持ちになった」

運び込まれて終わりではない。これ以上火薬を入れない。今あるものを撤去させる。防衛省の戦略を変更させてでも、宮古島の基地を使わない方向に持っていく。次々に目標を定めて抵抗するのは、諦めればさらにすごいものを押し付けられかねないからだ。強い抵抗がなかった奄美大島では、自衛隊がライフル銃を携行して民間地で移動訓練をするまでになった。短期間で島の空気は一変した。落胆して終わることも許されない厳しい状況だからこそ「勇気ももらったから続けられる」という言葉が出てくるのだ。

岸田政権になり、この国はいきなり「台湾有事ありき」「敵基地攻撃能力保持は急務」の路線を爆走し始めた。安倍元総理は「台湾有事は日本有事」というが、「台湾有事」とは一義的に中国と台湾の問題である。即座に日本が米軍と共に武力で呼応するのが相

当であると国民にすり込むのはやめてもらいたい。それは、日本列島にミサイル防衛網を作ることで中国をけん制するという現在の日米の作戦上、必ず日本国土を戦場にすることになる。言い換えれば、「台湾有事には、日本を戦場にしても参戦する」と宣言しているに等しい。とんでもない。

そんな危うい空気の中で、9月～11月は陸自10万人を動員した大規模訓練が実施された。「南西諸島有事」つまり沖縄あたりが戦場になったことを想定して、それに対応する移動・輸送・後方支援の訓練が、全国各地で民間輸送機関や港湾施設も巻き込んで実施されたのだ。いよいよ尖閣あたりで何かあるのか？ という空気が滲み渡っていくのは怖いことだ。

11月19日からは、陸海空の自衛隊員3万人が参加する自衛隊統合演習も実施された。この訓練には米軍5800人も参加。米軍主体の日米軍事演習に自衛隊が参加することはあったが、自衛隊の訓練に米軍が参加する形は初めてだ。それは、日本有事には自衛隊主体で対応すると内外に意思表示したに等しい。もちろん米軍がバックにいることが前提ではあるが、今沖縄にいる海兵隊は、来年度までにFABO（遠征前方基地作戦）に対応するMLR（海兵沿岸連隊）に再編され、「島々に分散型の拠点を配置して中国のミサイル影響下で機動性に富んだ作戦を展開するという方向」にシフトした。つまり、今南西諸島にある、固定された大型の基地は中国のミサイ

ルによってハチの巢にされかねないので、そこは自衛隊に任せて、米軍は臨機応変に太平洋の島々を拠点に戦うということだ。

自衛隊が沖繩を拠点化する動きは加速している。沖繩本島東側の与勝半島にある米軍のホワイトビーチには、このところ自衛艦が頻繁に姿を現しているが、その近くにある陸自勝連分屯地には南西諸島の四つ目のミサイル部隊が来ることが明らかになり、しかも石垣・宮古・奄美のミサイル部隊を統括する役目を追う。合わせて先島有事の際に物資を送り込む兵站拠点として整備される。隣のキャンプ・ハンセンや、辺野古基地と共に、沖繩本島東海岸が自衛隊の一大拠点になることも見えてきた。

2022年9月28日

シエルター？それが助かる道ですか？政府、先島を優先に設置検討

9月16日、沖繩の二つの新聞にはまた衝撃的な見出しが躍った。

○先島に避難シエルター

○政府検討 有事想定

さらに「屋良寛書」によって国と県の間で民間使用に限定する約束が交わされている下地島空港や、今回訓練で使われた石垣港も自衛隊の拠点にする意向も明らかになった。ここまでの動きに対して、報道も追いついていないし、沖繩の平和運動の方も、辺野古や PFOS などの汚染案件はじめ米軍の問題を多数抱えながらも手が回らない。しかし、この数年で、沖繩を二度と戦場にしないという当たり前の誓いが、崩されようとしている。少なくとも米軍基地問題と自衛隊問題を分けて考えているようでは、私たちは負ける。いま問題なのは「自衛隊の是非」ではなく「自衛隊が私たちの住む島々をどう使おうと

しているか」の問題であって「島々を二度と戦場にしない」ために「今のように自衛隊に私たちの生活の場である山も、空港も、港も訓練に提供し、やがて拠点に変えていかれたらどうなるのか」という差し迫った問題にどう向き合うか、ということなのだ。

今やこの国の国防を巡る方針は激変しており、戦争を避けたいのなら、自衛隊問題に踏み込むと選挙に不利、などと言ってはられない。皆が不得意な「国防」に真正面から向き合っていく英知がなければ、大げさではなく、私たちの生活の場は、戦場の島に逆戻りしかねないのだ。

○石垣市など複数候補地

政府は2023年度の概算要求で、武力攻撃に耐えうるシエルターの調査費を計上した。台湾情勢が緊迫しているとして、避難が困難な離島に地上型・

地下型、共に検討するという。

私は青ざめた。ペロシ議員の台湾訪問以降、アメリカの挑発に乗って中国の軍事威嚇行動も過熱し、さらにアメリカは原子力空母を韓国に入れたり、カ

ナダの戦艦と台湾海峡を航行したり台湾有事は近いという報道が日ごと増えている。新名中で、「シェルター」に予算が付いたと報道されれば人々は一気に不安に陥り、あらゆる方向に空気が動きかねないと懸念するからだ。

シェルターは各戸に造られるのか？ 何人入れるのか？ 食料は備蓄したとして、水道や下水はどう維持するのか？ 放射性物質には耐えられるのか？ 予算が足りず、シェルターが行き渡らないとか、案外早く戦場化すると、結局ガマ（自然壕）に再び駆け込むことになるか？ こんな妄想と不安で瞬時に頭がパンパンになる。シェルターの議論は「どうやって助かるう？」という思考に流れてしまう。

人はみな、なんとか家族だけでも助けたいと思うものだ。だからシェルター工事の順番の取り合い、逃げ勝負が始まったら大衆はもう收拾がつかない。しかし本来はまだ冷静にこう考えるべきだ。

「今本当に危機が迫っていますか？」

「なぜ私たちの島が攻撃されないといけなくなつたのですか？」

「それはまだ、止められますよね？」と。

それをみんなで考える段階を一定飛びに越えて、避難のシミュレーションや食料や水の備蓄合戦に乗り出してしまったら、それは戦争を止めるのに使うべき力を戦争準備につき込んで、逆に有事を覚悟下

というメッセージにもなりかねない。シェルター議論に埋没するのは、戦争準備を進めたい側の思う壺になることを即座に指摘しなければ！

この状況は一刻を争う、ということ、私たち「ノ

ーモア沖縄戦 命どう宝の会」(以下、ノーモア沖縄

戦の会)では朝からすぐに連絡を取り合い、県庁で記者会見を設定、シェルターや戦争準備に予算をかける前に、南西諸島の軍事要塞化中止を求めることになった。そして翌日21日に県庁の前で緊急集会を開くことを決めた。集会は昼と夕方二回行われた。たぶん、沖縄のこの危機感、本土にほとんど共有されていないだろう。

「ガマは、本来手を付けてはいけない、聖地なんです」 共同代表の具志堅隆松さんは顔をゆがめた。

「あそこは……。亡くなった人のことを考える場所であって、あそこでもう、二度と人が死ぬようなことはあってはならない。ああいう場所で二度と人を死なせてはいけません」

ずっと遺骨収集のボランティア活動に取り組んできた具志堅さんは、死者をきちんと家族のもとに帰すまでは戦争は終わらないと考え、頑張ってきた。

ところが、前の戦争の処理も終わらぬうちに次の戦争犠牲者がこの島から出ようとしていることにいたたまれず、この会の共同代表になった。今の危機を共有してこの流れを止めようと国連にも出向いて訴え、精力的に動いてきたが、あれよあれよという間に沖縄で軍隊と共に避難訓練をするとか、シェルタ

ーをつくるという話になり、そしてあろうことか「沖縄には避難に適した自然壕がある」などと発言する議員まで出て来て、なんて不謹慎なのかと憤っている。

「ぼくは、有事になったら全国の首長と議員たちは、全員を避難させた後に最後に避難してくれと言っている。それを見届けてから、ぼくは避難しますよ」

具志堅さんは十数年前、同じく「ノーモア沖縄戦の会」共同代表の石原昌家沖縄国際大学名誉教授らと共に「無防備都市宣言」の地域を増やして沖縄を平和にする活動に乗り出したこともある。シェルターもガマも、沖縄にいる150万人全員の分の命を守り切れるはずもない。それよりは、基地も軍隊もない文民だけの地域をつくり、ここに来ればとりあえずは攻撃を受けないという場所を確保する方が現実的では。そんな「無防備宣言の島」をいくつも確保しておくことも同時に考えないと間に合わないのでは？ という焦りは私の中にもある。具志堅さんも、それもやりたいけれども、と前置きをしたうえで、でも逃げ方や隠れ方を考えるより先にやるべきことがある、と今は主張しなければならぬと言いつつ、シェルターは最後の議論、その前に戦争をさせないことを優先して取り組まないといいないと、引き金を引かせない努力が先だと訴えている。

「沖縄から、日米の軍隊が中国を攻撃する。それをするからここで戦争が始まる。しなければ始まらない。とにかくその危機を取り除き、そのあとに、危険要因である軍隊は全部撤去させるところまで行くべき。それが日本軍であろうと……」

集会ではまず山城博治共同代表がマイクを握り、昼休みの県庁職員やサラリーマンたちに訴えた。

「避難シェルターは、沖縄が戦場になると認められないのです。誰が沖縄で戦争することを認めたというんですか!? 馬鹿にするんじゃないですよ! シェルターをつくる前に外交をやれ! 北京に行け! アメリカに行け!」「バイデン! 耳をこじ開けてよく聞け! 沖縄はあなたの方のものではないのだ。ここは私たちの島だ。ここで戦争することは、絶対に許さない」

そして登壇者は口々に、なぜ沖縄県民が戦争に怯えなければならぬのか、150万県民の命はシェルターなどでは到底救えないと怒りと危機感を露わにしていた。そして戦争をさせないためには沖縄県民の団結が必要で、県民大会を開催するべきだという意見が上がって来た。

でもこの問題は、実はとても難しく、すでに新たな分断を呼んでしまっている。命の危険が迫っているのに「シェルターいらない」とは何事か、と同じ反戦平和を目指す陣営からも非難の声がある。逃げ

る場所を確保するのがなぜいけないのか? 政府がつくると言っているなら少しでも安全な場所を増やしておいた方がいいではないかと。そして、自衛隊配備の問題と戦ってきた宮古島や石垣島の人々からも困惑の声。「私たちは安全に避難できる方法を確認してくれ、保護計画も不十分なうちはミサイルを配備するな、と訴えてきたもので、シェルターいらないうという闘いはできない」という。それも当然だろう。ミサイルが飛んでくる恐怖をよりリアルに感じている地域の人にとってみたら、沖縄本島でとんでもない主張を始めたと思解されるかもしれない。

しかし、だからこそ冒頭で書いたように共通認識と主張する順序が大事なのだ。「入れる人はシェルターに入ろう」「逃げられる人は逃げ場を確保しよう」と逃げ勝負が始まってしまうと、シェルター需要にたかる業者が島を闊歩し、不安を煽り、出ていく先がある人は出ていく、余裕のある人とそうでない人が分断される、という具合に共同体が崩れていくだろう。そんな末期の段階に至る何歩も手前にいる今だからこそ、無意識に戦争への道をゾロゾロと歩いていく人たちの群れに、あちこちからブレーキをかけなければならない。

7月、玉城デニー沖縄県知事が神奈川県知事との対話の中で、「ビッグレスキュー」という米軍と自衛隊も参加する住民避難訓練について、神奈川を手本

に沖縄も実施すべきという立場を表明してしまった。しかも知事から米軍に打診してみようという発言だったので、それはいかげなものかと批判が上がった。県知事として、災害からも有事からも県民の命を救うという観点からの発言だっただろうが、こうやって津波や大地震の備え、と言いつつ自衛隊の指揮のもとで、米軍の協力を得ながら大規模な避難訓練を実施するようになれば、不安な時は軍隊の指示通りに動く習性が刷り込まれていく。身の安全を軍事組織にゆだねるような従順な民が育ち、やがてバケツリレーから竹やり訓練へ。災害訓練から戦争訓練へと無理なく移行して行くだろう。軍隊が民を統率する手段として、どの国でも「避難訓練」が利用されてきた歴史の教訓を、私たちは十分に認識しておかなければならない。先日行われた知事選挙の前にも私たちは知事に対し、この「軍民合同の避難訓練」はやらぬで欲しいという要請をしている。しかし年内に大規模訓練をするという話はまだ消えてはいない。

ところで、全国紙にもキナ臭い記事が増えているが、最近特に産経新聞の論調に恐怖を禁じ得ない。「南西有事」という言葉を使い、ここが戦場になるのは既定路線のように記事を展開している。そして、今の弾薬保有量では戦闘継続力がない。20倍にしないと中国の侵攻に対抗できないという見方を繰り返して報じている。最前線の自衛隊部隊に必要な弾薬量のまだ1%しか南西諸島に運び入れられていない

として、貯蔵庫が不足しているため、米軍の弾薬庫を間借りする提案までしている。

この議論は、南西諸島に生活する人間からすると恐怖でしかない。「南西有事」に備えて20倍に増やす弾薬というのは、占領されたあとに、島にいる敵をせん滅させ逆上陸する作戦の中で、私たちの島に向けて撃ち込まれるものである。自分たちを焼くための火薬を増やせ、持ち込ませろという議論には怒り心頭である。国防を考える人々には、77年前も今も、島に生きる命は最初から透明人間のように全く見えないかのような。

このようなことを言ったり書いたりすると、すぐに「じゃあ日本が侵略されてもいいの?」という反論が来る。だがこの沖縄の平和運動を敵視する人たち、同じ国民の命や暮らしを犠牲にしても、自分の安心だけは確保したいと公言しているようなものだ。自分は絶対に現地に近寄らず、助かる側に入

りたいというみつともないまでの利己的な発言になつてことに気づいてないのだろうか?

私は幼いころからなぜか戦争が怖くて、よく祖母や両親に戦争の話聞いては「なぜ、あの戦争が止められなかったの?」と訊ねた。答えに窮する姿を見て、当時の大人たちは「騙されやすくて意気地がなかった」「愚かで情けない人たちだった」と思っている自分がいた。

でも今、まさに私たちは愚かで、鈍くて、戦争がこんなに迫っている。「まさかや」と思っている、令和の情けない人たちになりつつあるのだ。絶対に戦争を起こさせない、と立ち上がることなく、中国をやっつけろ!という勇ましい言動のグループを好み「自分だけは大丈夫」と思わせてくれるものにするろうとする。あの戦争で夥しい血を流して獲得した不戦の誓いをいとも簡単に捨てようとする勢力に加

担し、一部を犠牲にしても強い国を目指す方が得だと考えてしまう。私たちは実に弱く、学ばない、「戦争を止められない愚かな令和のニホンジン」なのだ。

最後にもう一度言う。私たち全員シエルターに入ることはできません。沖縄県民約150万人が避難する術もなく、受け入れ態勢の構築も非現実的。病気や高齢で移動不可能な3万人を置いて逃げるつもりありません。それを考えるよりは、軍事作戦にここを使うのをやめてもらう方がずっと現実的です。そうすれば私たちが島を捨てて避難する必要はない。この島から出ていくべきは軍事組織の方です。「どう避難するか」を考える前に、どうやって「戦争に向かうこの流れを止めるか」に全力を尽くしましょう!

2022年11月16日

南西諸島はすでに戦場なのか?——日米軍事演習キーン・ソード始まる

今月10日から、過去最大規模の日米共同軍事演習「キーン・ソード23」が始まっていることを、い

つたいどのくらい日本人が意識できているだろうか?日米合わせて3万6千人が参加、艦艇約30隻、

航空機約270機が投入され、宇宙・サイバー・電磁波作戦も実施する、かつてない臨戦態勢を思わせる

大演習だ。今回は、日米のみならず、カナダ、イギリス、オーストラリアも艦艇や戦闘機を送り込み、共同訓練に初参加している。これだけの国々が「海洋進出をもくろむ中国をけん制する」として沖縄県や鹿児島島の島嶼部と近海で中国を威嚇しているのだ。それを受けて、12日には中国海警局の船が領海侵犯したとか、14日には中国の無人偵察機と哨戒機などが沖縄本島と宮古島の間を飛行し自衛隊がスクランブル発信をしたとか、ニュース速報が国民を驚かせているようだが、これだけあからさまに中国を敵視した軍事包囲示威行動をこちらがやったのだから、中国も「舐めるな」と対抗するのはわかっていたはずだ。

しかし国民はわかっているだろうか？どちらが先に脅しを始めたのか。今、大演習中と知らずに速報だけ聞けば見誤るだろう。それだけではない。これは南西諸島が「アメリカの中国封じ込め作戦」の舞台となる演習なのだ。今回、沖縄県内では民間の空港や公道を軍用車両が我が物顔で走り、ウクライナで注目を浴びた高機動ロケット砲システム、ハイマースの共同運用も沖縄本島で実施された。与那国島では、初めて米兵が乗り込んで日米共同訓練が行われる。そして島嶼戦争用に開発された、タイヤを履いた戦車「16式機動戦闘車(MCV)」が県内初、与那国島に上陸する予定だ。

まさに、沖縄県の島々はどこも戦場になるんです

よ、と言わんばかりの状況に陥っている。今回の「演習」は「訓練」とは違う。演習というのは練習ではない。いざとなったらここで、こんな国々と、こんな軍事力を使いますよ、というフォーメーションを敵国に見せびらかす行為といった方がいい。それを抑止力と解釈し、国防に不可欠と頼もしく思う人もいるだろう。しかし、相手国はどう見るだろうか。中国・台湾に最も近い私たちの県土に次々にミサイルを置いていく行為が、強力に戦争を呼び込んでいるようにしか見えない。私たちがいることを忘れてミサイル戦争の準備に入ったとしか思えない。もはや辺野古などの「基地負担の増加」というフェーズは超えてしまい、「お願いだから、ここで戦争をするなんて言わないで」と泣いて懇願するような局面にまで進んでしまった。そのことが、実感を伴って本土の皆さんの所に伝わっているだろうか？

今回の演習では、自衛隊車両が県民の財産である民間の港を使って70台も陸揚げされ、公道を走る。先週、それを止めようと体を張って座り込む人びとが、機動隊に排除されていた。その様子は全国にちゃんと報道されているだろうか？このままでは第二の沖縄戦が始まってしまうと、様々な場所を抵抗したり集会が開かれたりしているが、それは本土の人は知らなくていいことなのだろうか？そんなはずはない。今起きていることが、正しい情報と映像でちゃんと伝われば、「そんな、国土を使って戦争をす

ることに賛成した覚えはないぞ！」と怒り心頭の国民がたくさん立ち上がってくれるはずだ。そう信じて、私は現場の様子を撮影し編集しているのだから、どうか見てもらえないだろうか？

同じ沖縄に住み、ここを戦場にしたいくないはずの沖縄県警に排除されながら、山城博治さんが叫ぶ。

「島を戦場にする。これはそういう演習なんだ。7年前の戦争、復帰して50年、遂にこういう事態がやってくるんですか？警察がそれを率先して手伝うんですか？沖縄の空域、沖縄の海域が戦場になるうとしているんです。沖縄県民が抵抗するのは当然でしょう？県民には、抵抗する権利があります！」

中城湾港に駆け付けられなかった人たちは、沖縄県庁の前に集まって抗議の声を上げた。自衛隊に書かれるまま、港湾や公道など民間地域の使用許可を「書類に不備がないから」とどんどん許可してしまう沖縄県庁にも、危機感を共有してほしいという切羽詰まった思いもある。危機感の共有といえば、与那国島は自衛隊問題が持ち上がってこの10年、宮古島はミサイル部隊が来ると報道されて7年、石垣では反対運動が本格化して5年の間、「島々がミサイル発射台にされたら生きていけない」という危機感を叫んできたが、沖縄本島は米軍基地問題にばかり力を入れて離島のSOSを受け止め切れていなかった。

「問題を共有する」

「恐ろしい事態が進んでいることを正面から受け止める」

「誰が誰を苦しめているのか、構図を割り出す」

この3つは、そんなに難しいのだろうか？

「沖縄県民はフロリダにでも逃げればいい」「沖縄の人は今、反対運動ではなく避難訓練をするべきでは？」などと書き込むネット民よ。軍隊と戦争を人の土地に押し付けたつもりなのだろうが、今進められている日米共同作戦が本土も戦場にしてしまうものだ、何度言ったら自分のことだと気づくのか？

まだよく解らないという人は『また「**沖縄が戦場になる**」って、**本当ですか？**』というブックレットを私たちの会で作っているの、ぜひ入手してほしい。沖縄が戦場になっても自分は助かると考えている知

人や家族には、1冊500円なのでぜひ購入してでも渡してほしい。今関心のない人も犠牲者になるのだから。そして後で気づいても遅いのだから、今危機を共有しなければ手遅れになってしまう。

先週、母の実家の足尾銅山(栃木県)に墓参りしたついでに、日光東照宮を48年ぶりに訪ねた。久しぶりに左甚五郎の「三猿」、いわゆる「見ざる・聞かざる・言わざる」を見た。もともとは、悪しきものは見ない、聞かない、悪いことは言わない、という教えなんだそうだが、私には今の日本人がこの国を転落させた病巣を見る思いがした。不正義や矛盾があっても目をつぶり、楽なものしか見ない。困っている人の声は聞かない。誰かが声を上げないといけないと知っていても、自分が損をするから言わない。しかしそれでは、太平洋戦争に突き進んでいく日本をどうにも止められなかった戦前の愚かな日本人と、

何ら変わらないし、だからこそ同じ運命を辿ろうとしているのではないか。

余談だが、この「三猿」は日本以外の国々でも少しずつ形を変えて教訓として使われているそうだ。異色なのは、今、私たち日本人を脅して、すかして、自己都合の戦争に協力させるばかりか土地を戦争に使わせてもらおうと企んでいるアメリカの情報機関にも、この見ざる・聞かざる・言わざるの3匹の猿が職員向けの看板に描かれていることだ。そこには、こうある。

「ここを出るときには、君たちがここで見たこと、聞いたこと、やったことは持ち出さな」

笑えない話である。左甚五郎もさぞ、現代の国情を嘆いているだろう。

2022年11月30日

与那国島に戦車が走るく打ち砕かれた自立ビジョンく

「与那国海底遺跡」をご存じだろうか。日本最西端の与那国島の海に、ムー大陸かアトランティスカ

と想像を掻き立てる神殿のようなものが沈んでいる。自然の造形物か。はたまた未知の文明の痕跡なの

か？ この海底構造物は衆目を集め、『神々の指紋』のグラハム・ハンコック氏をはじめ世界中の研究者

も訪れ、2000年前後に大ブームになったのだが、その火付け役の一人が、沖縄のテレビ局で全国向けに海底遺跡番組を連発していた私なのである。水中レポートが得意だったので、嬉々として与那国に通い、DVD版「[沖縄海底遺跡](#)」も出した。もともと、ジャン・ユンカーマン監督の与那国島が舞台のドキュメンタリー映画『老人と海』の大ファンで、一人で久部良の港に行き、半日カジキマグロを吊るすカギ針を眺めて幸せを感じているような人間だった。つまり、与那国という島は、私の中ではとても思い入れのある特別大事な島だったということをまず伝えておきたい。

そんな与那国島の行く末に嫌な予感がしたのは2007年のことだった。「沖縄の人はゆすり・たかりの名人」という暴言で知られるジャパンハンドラーの一人で、元アメリカ国務省日本部長のケビン・メア氏が在沖縄総領事だった時、彼は与那国の祖納港にアメリカ海軍のどでかい掃海艇を2隻も入港させた。補給や交流を口実にしていたものの、最西端の小島の軍事拠点化を狙っているのは明らかだった。当時、沖縄平和運動センターにいた山城博治さんをはじめ本島からも抗議団が与那国に飛び、接岸を拒否すべく座り込むなど港は大騒ぎになったのだが、船内パーティーやビーチバーベキューなどの米軍お手盛りの親善事業に取り込まれた島民も多かった。「親善に来た人たちにあまりにも無礼なふるまい」

などと住民に言われてしまいショックを受けたという話を、先日博治さん本人が語っていた。しかし今となっては、島が軍事利用されるといふ彼の危惧こそ正しかったのだが、後の祭りとはこのことだ。

ケビン・メア氏は、後日著書の中で「台湾・尖閣有事の際に与那国や石垣の港を戦用上使用する必要がある」と明言している。したがって与那国島に自衛隊基地を作ればすぐに米軍も使うことは容易に想像できた。自衛隊誘致に反対した人たちは、基地ができれば米軍の戦略の中で戦争の島にされてしまうとわかっていた。一方、誘致派はそれを否定した。自衛隊の受け入れを巡る住民投票をやる、やらないで揉めていた長く苦しい日々の中で、島のリーダーたちは一貫して「自衛隊は入れても米軍は入れない」と明言していた。騙されたのはどちらか。今月実施された日米共同演習「キーン・ソード23」で、ついに米軍がやってきた。アメリカ海兵隊員40人があっさりと与那国に入って訓練をした。米軍は入れないと言っていた人たちは、何の抵抗もできなかった。それだけではない、南西諸島での有事を想定して開発された戦車が、今回の演習で初めて導入された。105ミリ戦車砲をむき出しにした「16式機動戦闘車(MCV)」は、キャタピラーではなくタイヤで走れるように改良されているので、島民が日常使っている公道を縦横無尽に走り回ることができる。戦車攻撃、つまり敵との上陸戦で活躍する殺傷力を持つ

「戦車」が、島の子どものたちの通学路を走行するという信じられない光景が実際に展開されてしまった。与那国のことを知らない人は、日本の最西端の小さな島なのだから、離島苦にあえぎ、過疎に苦しみ、自衛隊がもたらす税金や振興策、人口増加に飛びついてしまったのだろうという見方をするかもしれない。しかしそれは全くの間違いだ。2005年にピークを迎えていた平成の大合併の波をくぐりぬけ、与那国島は合併を拒否した。なぜか？

与那国島は、保革を超えて町民全体が一丸となつて「与那国自立ビジョン」構想を立ち上げていた。かつて島の先人たちが交易の島として与那国をおおいに発展させていた歴史に倣い、台湾との交流特区を目指して名乗りを上げたのだ。私は当時、那覇で報道する側に居て、与那国島の持つ底力に惚れればれた。だから、2007年のケビン・メアの目論見も与那国なら押し返せる、与那国を舐めるな、とまだ強気で眺めていた。沖縄の人間はゴージャスも作れない怠け者だと、言いたい放題の無礼な外国人の鼻を明かしてやれ！ 与那国よ！ と。

当時の日本政府は地方創生をうたい文句に、地方が自主的に財政基盤を強化するよう促し、自らの財政難を乗り切ろうとしていた。小泉政権自慢の「規制緩和」を乱発し、既得権益で硬直化した社会をぶっ壊して、地域の実情に合わせて政府も汗を流すと大見得を切り「特区構想」を何次にもわたって募集

した。それに夢を掛けた与那国は、姉妹都市である台湾の花蓮市に事務所を置いて、二国間の行政事情をすり合わせ、国内外でクリアすべき課題を洗い出して人と物の流通をどうやって構築できるか試行錯誤していた。第7次特区申請、さらに形を変えて第10次特区申請にも応募。社会実験で実績を作り手続きを積み上げていた。

2007年、台湾事務所を作って初代所長として精力的に動いていたのが、当時与那国町役場で自立ビジョンを担当していた田里千代基さんだった。台湾事務所駐在中の田里さんの日記を見ると、台湾経済圏の枠組みの中で自由往来できる道筋をつけるべく、花蓮市の積極的なバックアップを受けながら、日々台湾で奔走していたことが見て取れる。解決すべき課題は多かった。例えば、国際港湾は本来5000トンの船が3隻横付けできるバースが必要であるとか、年間15万トンの輸出入量が必要ではないなどの基準があるが、そこは離島の実情に合わせた規制緩和を国が認めてくれればクリアできる。税関システム、航路、一つひとつのルールを見直すことで「経済交流特別区」を創出することは可能という道筋も見えていた。当初は自民党の国会議員らの応援もあり、話は進むかに見えた。しかし、雲行きが変わったのは2007年だった。6月に、例のケビン・メア氏と掃海艇が島にやってきた。与那国島は多国籍の人流・物流拠点としての開かれた島であるよりも、国防の島、侵入を防ぐ要塞の島、米軍の不

沈空母としての役割を果たしてもらわねばならぬ、というのが中央の考え方だった。自立に向って結集していた島民の夢は、日米政府から冷や水をぶっかけられた格好になった。

翌年から、当時外務副大臣だった「ひげの隊長」と佐藤正久氏が頻繁に与那国に来るようになった。しかし、来ても島の中を歩かない。与那国空港の一室で町長や町議、島の実力者と会い、自衛隊を引き受けると、こんな事業もあんな振興策もとれる、収入も人口も苦勞せずに増やせる、といいことばかりを吹聴した。そしてほかの島同様、自衛隊誘致組織である「防衛協会」を島に作らせた。あとは協会に誘致署名を集めさせ、防衛省に要請させるのみ。一方で、重ねて提出される特区申請を国は認めない。与那国自立ビジョンは急速に色あせていった。田里さんは言う。

「もしも特区申請が通っていたら、自衛隊誘致の声はあっても潰せたと思う。必要ないよ、と」

あと一歩だった特区構想は、国の思惑で潰された。それがけん引役だった田里さんの実感だ。

おいしいロールケーキが売りのレストランを経営する猪股哲さんも、与那国に移住して18年。自立ビジョンで団結していた島の熱い時期を知る人だ。

「もし自立ビジョンがあのまま実現していたら、

自衛隊の問題はなかったんじゃないか。台湾と活発に交流する中で、軍隊がないと隣の国が攻めてくる、っていう発想は笑い飛ばせたと思う」

今回、私が与那国で取材したかったのは、改めてあの自立ビジョンは何だったのか？誰に潰されたのか？という点。あともう一つは、現在進行形の軍事要塞化が、いかに島の人たちの気持ちを傷つけているかという問題だった。自衛隊誘致の動きに呼応し、島を軍事利用されたくないとすぐに立ち上がったグループが「与那国島の明るい未来を願うイソバの会」だった。与那国島の伝説の女酋長サンアイ・イソバの勇ましい名前を戴いた市民団体で、女性が中心だった。彼女たちの活動は全国誌にも何度も取り上げられた。しかし、住民投票に敗れ、石垣島や宮古島にも自衛隊基地が着工されていく急激な軍事化の中で、活動が見えなくなっていく。

前出の猪股哲さんもITに強く、SNSを駆使して与那国の問題を丁寧に発信して全国から応援の声が上がるまでになっていたが、住民投票による地域の分断がプライベートまで押しつぶし、厳しい状況に追い込まれていると風のうわさで聞いた。国や軍隊という組織を相手にする市民運動を継続することは、どれだけ辛い。長期化すればするほど、組織は痛まずとも個人は痛んでいく。その理不尽をずっと見てきた。それだけに、与那国町長が「島内に反対する

人間はおりません」と豪語するのを胸がきしむ思いで見ている。あんなに抵抗していた人たちが賛成に変わるわけではない。どんなに苦しいだろう。しかし、与那国島の激動期に大した取材もできず力になれなかった私には、今さら島に行ってインタビューする資格すらないのではないか。自分の中で、与那国に行くハードルがどんどん高くなっていた。

それでも意を決して与那国に撮影に入ったのは、正視できないと逃げ回っている自分といかげんに縁を切りたかったからだ。今回猪股さんは奇しくも私にこう言った。

「不都合なことが起きたから出ていくというのは性に合わなかった。そこに住みながら考えたり決着をつけたりしなければいけないこともある。それやったら負けかなと。自分が社会に変えられてしまわないためにも」

大事にしていた地域行事にも誘われなくなった。妙な噂も流された。彼の受けた精神的なダメージの大きさは、想像以上だった。今は畑仕事に救われて人間関係の再構築をしていると笑ってくれる猪股さんだが、辛い分断の日々は現在進行形なのだ。それなのに彼の言葉は澄み切っている。魂は全く蝕まれていなかった。彼はこうも言った。

「南西諸島を戦場にするような状況を前にして、

憲法を掲げている民主主義の担い手として、主権者の一人として、意見は表明しないとイケないと思うんですね。不断の努力は、一人ひとりに課されているものだから。だから……どんなに辛くても、怖くても、いろいろ噂を立てられても、やるべきことは、やる」

留まる強さ。正視できる勇氣。ダメージを受けることは免れないと覚悟しつつ、いつかは乗り越えられようと自分を信じる力があるから、彼は逃げずに島にいる。傷つくことができるのも強さなのだ。弱ければ、自分が傷つくと予想した時点で逃げてしまうだろう。ひるがえって私はどうだ。外から眺めて、応援して、心配して、ハラハラしてるだけなのに傷ついたようにふるまい、与那国島に対して両の手足を引っ込めていただけ。なんとというチキンぶりだ。映画『沖繩スパイ戦史』での与那国の撮影も、共同監督の大矢英代さんが八重山担当だからと行ってくれたことに内心ほっとしていたことを今懺悔する。

2005年にはみんなで夢見た経済特区による自立。その話を今、同じことを口にするだけで四面楚歌になりかねないという島社会の理不尽。誰が島の空気を捻じ曲げたのか。一番危ないロープにすぎないように仕向けたのは、誰だったのか。

「自立ビジョンは、あきらめていませんよ」

そんな激流の中に立ってなお、田里さんは言い切った。イソバの会の女性たちも、怒りに震える声を精一杯戦車にぶつけ、公道に向ってくる戦車砲を正面から見つめるといふ仕事から逃げなかった。でも私は、狩野史江さんが「与那国になんで戦車なんか持ってくるの！」と叫ぶ姿を撮り続けることができず、思わずスイッチを切ってしまった。泣いている彼女の顔の間にカメラを押し付ける自分を瞬間的に嫌悪した。でもそれとて中途半端だ。そのあと撮影素材が何もないファイルを見て、自分は何をしに行ったのだ？ とパソコンの前でイラつく。

戦車が去り、スイッチを切って呆然としていると、車で追いかけて撮影するはずの猪股さんも、放心したように現場で佇んでいた。

「お、追いかけてようよ！」と気を取り直して言う私に、「もう、いいかなあ。そんな気持ちになれないというか……」とうつろな目で彼は言った。

「でも、朝せっかく下見をしたんだし、撮ろうよ。記録しようよ」と言いながら、自分は鬼だと思った。私は1席しかあいていなかった帰りの便の時間が迫っていたので同行を断念、空港に残った。結局最後の戦車の映像は、仕方なく車で先回りした猪股さんが、一人で撮ってくれたカットである。

彼がどんな気持ちでカメラを回しているか、伝わ

るだろうか。私には、撮ってくれたことに感謝しつつもせつなくて苦しい、見るに堪えない映像に映る。そういう私こそ、チキンであり鬼であり、もう与那国への向き合い方が破綻している。こんな風に過去の経緯に振り回されてヨレヨレになった私より、別

の人の方がよっぽどちゃんと報道の基本を踏まえて撮影できるだろうと思った。じゃあ私の仕事はいつたい何なのか？何のためにカメラを持って、ツライツライといいながら島をうろろしているのだろうか？

答えは、わからない。ただ今回ほど、真正銘自分がかつこ悪いと自覚したことはない。猪股さんを見送った後、与那国空港のベンチで、私はどうにも自分を肯定できず、カメラを持つ手をただぼうつと見つめていた。

2023年2月1日

バケツリレーと安保3文書く意味のない訓練をやる意味く

昨年11月末、沖縄県最西端の島・与那国島の「島民避難訓練」の映像が繰り返し全国ニュースで流れた。たったの20人しか参加しない田舎町の避難訓練が、なぜ全国ネットになるのか。それは、ミサイルの飛来を想定した訓練であり、最近実際に近くにミサイルが飛んできた島であり、「台湾有事」に最も近い島の訓練というイメージがあるからだ。が、映っているのは、コンクリートの公民館に逃げ込んで、窓のない部屋で頭を抱えるだけの抜けた姿。誰が見ても、これでミサイルから身を守れるのか？と

目が点になるような映像だ。しかし各局が大真面目に、ニュースもワイドショーも繰り返しそれを流したさまを見て、「こうやって利用されていくんだな」と私は苦い悔しさのようなものを抑えきれなかった。

「国境の島は大変不安だろう」

「いよいよ迫ってきたのか。国防をすっかりしないと」

「これは軍事費を渋っている場合ではない。増税もやむを得ない」

このような映像を見せられれば、視聴者の関心はどうしても国防に向けられる。危機を煽れば煽るほど、軍拡増税のハードルは下がっていく。私はその時期東京にいたのだが、与那国の映像がテレビに映し出されるたびに、軍事費が「チャリン、チャリン」と投げ入れられていく感じがした。昨年盛んに特集された、与那国の漁師たちの映像もそうだ。

「操業海域近くにミサイルが落ちた」

「逃げる場所もない。シェルターも必要では」

漁協を取材しこんなセリフを引き出す「危機にある国境の島」的な企画も同じだ。スタジオではキャスターが「彼らが安心して漁に出られる、そういう国防でなければなりません」などと付け加える。

危機が煽られれば視聴者は、軍備増強することも、日米同盟や中国包囲網を構築することも、好ましく思うようになる。しかし、戦争する国に国民を誘導する、そのアイコンのように与那国島を使うのは勘弁してほしい。島の豊かな文化や生活を描くことなく、国防に翻弄される姿だけ切り取って利用するのはやめてほしい。悶々としながら沖縄に戻ると、安保3文書が出揃い、閣議決定へとあれよあれよと進んでいった12月。この国は今まさに、振り落とされそうな勢いで軍国主義へと突き進んでいる。

それが南西諸島にどう影響するか、安保3文書の閣議決定の内容を整理しておこう。

・「GDP比2%」を目指して5年で防衛費を倍増⇒世界第3位の軍事国家に。

・敵基地攻撃能力を持つ。敵基地に届く巡航ミサイルのトマホークと、自衛隊の「12式地对艦ミサイル」の飛距離を伸ばしたものは主に南西諸島に置かれる⇒専守防衛国家をやめたも同じ。

・「日本が主たる責任を持つて対処」「同盟国・同志

国と連携して現状変更を阻止」と明記⇒仮に米軍やNATOが不在でも、日本人が日本の国土で戦う覚悟を国際社会に宣言。

・「最大の戦略的挑戦」と厳しい言葉で中国を敵視⇒中国は「顔に泥を塗られた」と激怒。

つまり日本は、敵国の攻撃も先制攻撃も可能な世界第3位の軍事国家になり、日本人が主役になって国土で中国と戦う覚悟を内外に示した。国際社会が驚くほどの変化だ。その直後に決まった予算内容も含め、これで南西諸島は軍事化の激流にさらされていくことになる。

さつそく那覇駐屯地司令部や与那国島の自衛隊基地の地下化が発表された。シェルター建設に予算が付いたことも併せて、これは防衛省がここにミサイルの雨が降ると認めたも同然である。

さらに今年、島々の港湾、空港の軍用強化が動き出す。FABO（遠征前方基地作戦）という米軍の作戦を可能にするための整備だ。海兵隊は、中国の反撃を避けながら小編成部隊で島々を転々としてミサイルを撃つ。だから各島に軍艦が接岸できる港、戦闘機F35が離着陸できる滑走路が必要になる。ところが政府は、住民避難のための港湾整備のように説明している。これに反対すれば、離島の安全確保のためのインフラ整備を邪魔するのか？と言われかねない。

沖縄じゅうに兵站基地が作られる。昨年、アメリカ軍の弾薬庫（嘉手納弾薬庫と辺野古弾薬庫）を自衛隊も共同使用する方針が固まったが、まだ足りないと、沖縄市池原の自衛隊沖縄訓練場に武器弾薬を保管する補給拠点を造る計画が発表された。ただでさえ嘉手納弾薬庫を抱えて万が一の心配をしてきたのに、と沖縄市では反発の声が上がっている。

こうして反対の声ばかり増えては防衛省も頭が痛いのだろう。今回、とんでもない「3億円の交付金」が予算化された。訓練に協力した自治体に「訓練交付金」を出すという。自分の島で戦争準備をしないで、という声を封じる札ビラとして税金が使われる。

さらに酷い話は、米軍が沖縄に無人ミサイルを置くことだ。確かに、ミサイル発射拠点は瞬時に暴露されて反撃を受けるから、地对艦ミサイルを無人で発射すれば米兵は死なずに済む。しかし発射に使われた島々に死傷者が出るのは防げない。FABOでミサイルを撃って移動する作戦もそうだが、残った島人は反撃にさらされる。これら数々の恐ろしいことを、県民に知らせもせず決めていくのが「国の専権事項」だとしたら、この国は「国防は民主主義を停止させて構わない」と認めたも同然だ。それはもはや民主主義国家ではない。とんでもない状況が今、どんどん生まれているのだ。

そんな最悪の年明けを迎えた沖縄で、新年早々嫌なニュースが入ってきた。なんとあの与那国でやったのと同じ避難訓練を、県都・那覇市でもやるというではないか。「×国から弾道ミサイルが発射された」想定で1月21日土曜日に実施されるということで、あわてた市民が5日前から毎日、那覇市役所の前に立って「危機を煽るミサイル避難訓練は即刻中止して」と声を上げた。これは団体ではなく、いち早く動いた数人が核となつてはじまった抵抗で、当日の訓練現場では70人までに増えていた。

参加者は、口々に納得できないと憤る。そもそも、ミサイルを発射する×国とはどこなのか。なぜここに飛んでくるのか。那覇市の施設の地下駐車場に住民を避難させるというが、それで安全だという根拠はあるのか。30万人余りの那覇市民が隠れる地下はないが、いざというときはどう指示をするのか。那覇市は国と一体になって戦争の危機を煽るのか。抗議を続ける人々は那覇市に回答を求めた。根本的に「備えあれば患(うれ)いなし」にもならない、市民がさらなる不安に陥るような訓練をする意味はどこにあるのか？

先の大戦で、全国各地域で取り組まれた「バケツリレー」。地域の安全は自分たちで守ろうと勇んで消火訓練を繰り返したが、アメリカ軍が投下する焼夷弾の前に全く機能しなかった。日々の「竹やり訓練」

も、実際に鬼畜米英を殺すことはなかった。両方も、何の役にも立たなかったのだ。とんだ笑い話なのだが、しかし令和の私たちは、もう笑えない。

「そんなことやったって無駄でしょ？ それより今は必死に戦争しない方法を考えるべきでは？」

その当たり前が言えない空気、みんなで団結するべき時に協力しないとまずいという思考停止はもう県や市町村を上げて始まっている。

戦時中、火事も消せなかったバケツリレーが、いったい何の役にたったのか？ それは、国防婦人会が地域社会の非協力的な人間を炙り出すのに役立つた。いったんバケツリレーに参加したらもう、竹やり訓練に移行する流れには逆らえない。銃後の社会を乱す「非国民」は誰か。不安と欠乏は、憎悪を注ぎ込む相手を求める。「あなたのような人がいるから負けるのよ！」と叩く相手を探す。

バケツリレーと竹やり訓練が実際に機能するかどうかは、実はどうでもよかった。心の戦争準備と思考停止、それを浸透させるツールとして見事に機能したのだ。振り返って、今回の避難訓練はどうか。映像を見てもえればわかるように、「これでミサイルから本当に身を守れるかどうか？」は、きっと誰も真剣に考えてはいない。参加した人たちは、国に協

力し、地域に協力した。自分に課せられた仕事以上の意見は言わない。何もしないよりはいい、と不安も紛れた。少なくとも、一生懸命やっている消防団員を困らせるような抗議などはしない。

それのどこが悪いの？ 何が問題なの？ というかもしれない。そこが肝だ。それこそが戦争協力であり、多くの人を死に追いやった戦争を動かす原動力になっていったのだ。ここがわからないと、また戦争を起こす側になるのだと私は厳しく問いたい。災害訓練の皮をかぶっている戦争訓練に協力するのですか？ またバケツリレーを始めるのですか？ と問わなくてはならない。早くも非国民を炙り出したのですか？ と問わずにはいられない。

3月には沖縄で、台湾有事を念頭に、離島住民の避難手順を具体的にたどる大規模な図上訓練が予定されている。もう待たなしたのだ。国・沖縄県と離島の5市町村が、民間の輸送手段を使って九州まで避難させるシミュレーションを実施するという。これら「国民保護法」に基づいた訓練と称するものが、これからあらゆるレベルでどんどん繰り返されていくだろう。最初のいくつかで止められなかったら、もう異議を唱えるものは排除される、そういう空気に支配されるのは時間の問題だ。そうやって素直に「国民保護」という言葉を信じ、逃げることに隠れることに埋没した大衆には、もはや戦争を止める力

は持ち得ない。だからこそ、逃げる訓練をする前に、冷静な頭のうちに戦争を止めようと抗議に集まった人たちは叫んでいるのだ。

午前10時。ミサイルが発射された体で、サイレンが鳴る。「ミサイルが発射されたと思われます」という機械的な男性のアナウンスが流れて、みんな地下に移動。地下駐車場では壁に沿って座り、頭を抱えてミサイルをやり過ごすポーズをとった。10時8分にミサイルは通過したという。そんな「ごっこ」なのだが、地下室の様子、かつての防空頭巾のようなものをかぶった子どもたちの怯えたような顔を見てほしい。笑話のような訓練のはずが、78年

前、暗いガマ(洞窟)の中で怯えていた子どもたちの姿を想起して絶句した人間は私一人ではないだろう。訓練に参加した、ある若いお母さんは言った。

「参加してよかった。でも、抗議する人の声で指示が聞こえなかったのが残念だった」

彼女は反対運動の人たちに訓練を邪魔されたと感じたのだろう。しかしお母さん。あなたがあの日聞くべきだったのは、本当に避難を指示する声だったのか? 「避難より戦争を止める方が先でしょ!？」という叫びにこそ耳を傾けるべきではなかったのか?

避難先の本土のどこかで、仮設住宅暮らしを始めてからでは遅すぎる。生まれ島で安心して子育てを続けたいと思うのなら、今こそ「そもそもなんで沖縄が戦場にならなければいけないの?」という問いに正面から向き合って、この流れを一緒に止めてほしい。いま必要なのはバケツリレーに参加することではなく、地下を掘ることもなく、まだ間に合うから、と仲間を誘って「隣の国と仲良くしたい」と叫ぶこと。未来の子どもたちに渡す沖縄がどす黒い戦雲に飲み込まれそうになっていることを知らせあって、みんなで暗雲を吹き飛ばす行動力ではないだろうか。

三上智恵監督 最新作『沖縄、再び戦場へ (仮)』

スピンオフ作品資料

[2023/3/12 Ver]

〈お問い合わせ〉

沖縄記録映画製作を応援する会 事務局

Eメール：info@okinawakiroku.com

okinawakirokueiga@gmail.com

TEL:03-5919-1542(平日 11:00~18:00) FAX:03-5919-1543

〒160-0022 東京都新宿区新宿5丁目4-1

新宿Qフラットビル 306号室 東風内